

# これからの猪猟

（11回）

田宮 治

## 猪猟の泣き笑い

好きて猪猟を志してその頂点を目指したからには、どんな悪条件が重なっても、苦しい難題が打ち寄せようとも、己が信じる道を真つすぐ突き進んで極致の猪猟道で完成させなければならぬ。

素晴らしい猪猟を何度でも思いどおりに実践して猪猟を楽しみ、見事な結果を思い出して「ああ、ここまで来られてよかったなあ……」と納得して、その成果を吟味し、自画自賛できるようになるまでには、どんなに頑張つて努力したところで、道程は長くて厳しく、そんなに容易く頂点に立てるものではない。

ましてや、人それぞれの猪猟の中で自分が信じる独自の猪猟を追求してどこまで登ってみたと

で、万人が期待し納得し、十分理解して楽しめる猪猟道の完成などは私ごときにはできないはずもない。

ここで大事な基本的な考え方は、自分が楽しめて、簡単に猪が獲れる安心安全な猪猟である。

年ごとに巡り来る猟期には、必ず苦心して仕上げた愛犬たちを連れ、実戦の場で繰り返し猪に立ち向かつて勝負をかけ、頂点に挑み続けてきた。この壮大な夢目標は、誰にも頼らず、自分と犬たちの頑張りだけで大猪が撃ち獲れる、安心安全な猪猟道を完成することにあった。

ところが、この簡単明瞭な命題（夢目標）こそが、かなりの曲者で、人様には十分理解していただけなかったり、俄に信用して活用してもらえない難題なのである。

私は人様が理解できない、この激戦の急所を自分がやれる限りの

最高の猪猟を押し出すことで、俺流猪猟がいかに理にかなった「これからの猪猟道」であるかを実戦の場で実証したのである。

そして、その見事な結果を持つて証明することで、この猪猟道が一番良い頂点までの近道であり、

これからの猪猟道を切り開いていける戦術であることを理解してもらいたいと思っている。

実戦の場では泣くも笑うも猪犬次第。この絶対的な猪猟の現実の前で、誰もが決して忘れてならないことは猪犬の訓練である。

猪犬芸が猪猟のすべてを決定する実戦の場では、いつでも、どんな猪にでも当たり前のように撃ち獲り、心から満足して高笑いできる超一流の猪犬に見事に仕上げる大役を担っているのは猪獵人（本人）なのである。

この当たり前の現実に猪獵人が

気付き、猪犬仕上げに本気で取り組んでいただき、猪猟を楽しみ、笑顔がはじける実戦の場を演出できる超一流の猪犬を完成させてもらいたい。

そんな思いで「猪猟で素晴らしい実戦をこなして良い結果を出し続け、思い切り楽しみ、いつも笑いが絶えない猪猟を完成させるためには、資質の良い仔犬を求めて自分の猪猟方法に合うように訓練して極致の猪犬を完成させることだ」と繰り返し発信してきた。

## 猪犬芸のいろいろ

猪犬芸と一言で言ってみたとこ

ろで、その芸は千差万別である。グループ猪で大切なことは、追ひ犬芸から単独猪猟（二、三人）に欠かせない噛み止め芸まで、実戦で見せる猪犬芸は実に驚くほどい

ろいろある。

一口に噛み止め芸と言っても独特で、犬種や訓練によって仕上がる一芸もなかなか奥が深く、極めるのも、理解することも、生半可な頑張りでできるものではない。

基本的に猪犬である以上、猪ががっちり止めて主人に撃たせるのが当たり前である。しかし、実戦で長い時間必ず猪を止め置くようになるまでは、猪犬がどの一芸を完成して止めようと、そんなに簡単に撃ち獲れるものではない。

単独猟では猪犬が鳴いて止めようが、噛んで止めようが、猪をがっちり止め置く一流芸に仕上げないことには、いかに達人であつても猪の止め撃ちはできない。

ここで問題となるのが、鳴き止めが良いのか、噛み止めが良いのかである。この二つの芸は一見すると全く異なった猪犬芸に見えるが、実は実戦の場で猪と繰り返して戦い続けてきた猪犬が進化し、成長した結果の極致の猪止め犬芸なのである。

この分かりづらい重要な猪止め犬芸の検証、説明こそが、今回、

問題提起している「猪犬芸のいろいろ」なのである。

一般的に考えれば、猪犬が猪を止めるのは、鳴き止めるか、噛み止めるかの二通りの止め芸だけだが、ある猪猟人は「噛み止め犬はケガをするので、金もかかるし、大事な猟期に死亡することもあるので、鳴き止め犬がいい」と言い切る。また、「いや、そうでない。単独猟では猪をがっちり長い時間止め置かないことには撃ち獲れないので、強烈な噛み止め犬に限る」と言う人もいる。

このように、猪犬の評価は犬芸の好みや猪猟人の水準によって、この二大止め芸でさえも意見は様々に分かれる。このもつともらしい意見こそが、実は理解できない犬芸評価の難しさであり、誰もが迷う猪猟道の道順なのである。まさに、猪犬完成の胸突き八丁（物事を完成させる手前の一番苦しい場面）なのである。

私は一人でも多くの猪猟人がこの難関を迷ったり、諦めることなくすすなりと突き進めるように問題提起したのである。この先の猪

猟道の難所は、私が押し進める猪猟道の近道に乗って見事に乗り越えて堂々と猪猟の頂点に立つてほしい。

そんな思いで猪猟の前進を願い、全身全霊でこの難関の道案内をやっていききたいのだ。

猪止め犬には、鳴き止めるか、噛み止めるかの二通りの止め芸で、前者は鳴き止め犬、後者は噛み止め犬と呼ばれると述べた。

鳴き止め犬は、その芸を極めて猪犬として完成する。一方の噛み止め犬もその芸を極めて完成する。だから、鳴き止め犬と噛み止め犬は全く別物なのである。

しかし、多くの猪猟人の間では、「鳴き止め犬がいい」「いや、そうではない。絶対に噛み止め犬に限る」と、それぞれ前述のように主張に差が出てくる。

さらに「噛み止め犬はケガが多いい。ならば防護チョッキを着せればいい」「金がかからないように傷口を自分で縫ってやればいい」と、ベテラン猟師までもが猪止め犬の論評を繰り広げている。

多くの猪猟人が思い込みによつ

て結論づけている、ここまでの猪止め犬の評価は、すべての点で猪犬が成長過程の未熟な猪止め芸である。この二つの鳴き止め芸と噛み止め芸をもつて、どっちが良いなどの評価を下すのは間違いだと考えている。

私が人生を懸けて挑戦し、死に物狂いで登り続けてやっと完成した猪犬（一〇〇頭くらい）の中から、実戦でいつも見事な猪止め芸をしている一軍猪犬軍団（十頭）を厳選してこの難関に取り組み、それぞれの猪犬が繰り出す猪止め芸を比較、分析、検証すること、誰もが納得できる結論、つまり、「猪猟の神髄である」と言い切れる結論（答え）を導き出したのである。

ところで、私の犬舎では一軍猪犬軍団の猪止め芸の基本は、三才くらいまでの若犬に見られる強烈な噛み止め芸である。この若犬の無謀なまでに猪に噛み込む強烈な芸がベース（基礎）となる。それらが実戦の積み重ねによってどんどん登り続け、超一流の猪止め犬軍団が完成したのである。

猪猟道を見せつける若犬の猪止め芸は、実戦で猪と対決するたびに相手の強さを知り、その強大な猪に打ち勝つ対策を若犬自身が考えることで、猪芸は限りなく磨かれて成長するのである。

この若犬の成長を援助するのは、当然、主人（猪獵人）が全力で若犬が止めた猪を逃さず撃ち獲ることなのである。特に若犬が三

才くらいになるまでは、猪の強さを知らないため、どんな猪でも手加減せず噛み込むので、大ケガをしたり、時には素晴らしい噛み止め芸を連発する有望な若犬ほど殺されたりするのだ。

ここで大事なことは、ケガをさせずに一流猪犬に仕上げることである。それが猪犬の主人の最も重要な役目となる。このことを肝に銘じて、猪獵の頂点を目指す獵人は迷わず諦めず、何度でも猪犬仕上げに挑戦して一流猪犬を完成させ、その犬たちをがっちり守り抜かねばならないのである。

以上のことから、前述の猪止め犬の問題を検証すると、まだまだ成長途上の若犬なので、「鳴き止

めがいい」「噛み止めがいい」と判断する段階ではないということである。

若犬たちが猪と戦って極めた鳴き止め芸も、噛み止め芸も未完成なので、どちらの猪止め芸をもつて戦っても簡単に猪は獲れるものではないと考えている。

また、自分の愛犬の大ケガを自慢げに話している大物獵師もいるようだが、これでは猪犬の成長に繋がるものは何もなく、ただ犬たちが可哀想だけである。猪犬が大ケガしたり死亡するのを防ぐ対策は実戦（訓練）で猪止め芸を限りなく磨き、進化改良して一流猪止め芸を完成させることである。

さらに、猪犬の牝（猪の弱点の足に噛む）と牡（頭に強く噛み込む）をペアで使い、その協調性を生かして実力を付け、いつでも猪に勝てるように力を結集する。また、二、三頭の猪犬の噛み止め芸の相性を見て、組犬軍団を作り、どんな猪と戦っても力負けしないように犬芸を磨けばケガなど

ちなみに、私を実戦で体験した

理想の戦法は一〇〇<sup>キ</sup>の猪には二〇<sup>キ</sup>の猪犬五頭（一〇〇<sup>キ</sup>）で戦う戦法で、これなら確実に完勝できる。猪と戦って絶対に愛犬たちを守り抜き、犬芸を極致まで成長させて完勝するのは、猪犬だけでなく、あらゆる戦法を考えて万全の対策を立てて戦うことも猪獵人の重要な仕事である。

その基本となるのが、猪犬芸がどのように進化して成長するのかを正しく見極める目が必要である。自分が作った猪犬なら、生後四カ月くらいの仔犬でも一胎兄妹犬の遊ぶ姿や鳴き声を聞きながら、声をかけ続けていれば、仔犬たちの将来の出来栄は見極められる。

仔犬の時に褒め言葉をかけて、毎日名前を呼び続けて遊んでやることは猪犬作りの基本である。このことが、成犬になった時の犬芸完成に重大な影響を与えるのは言うまでもない。

私の犬舎の一軍猪犬軍団なら実戦のいざという時、大声で指示する「待ってろよ」「よし行け！」「ジジが来たぞ」「今行くから頑張

れ！」や、獵が終わって「さあ、帰るぞ」などは全犬が理解している。日常の簡単な言葉はいつも話しながら実戦しているので、一軍の全犬は言葉がすべて分かっているのである。

このあたりの信頼関係がないと、若犬たちの犬芸を検証するのは難しいが、それでも犬たちを使っている主人の証言や評価を検証すれば、自ずと犬芸は分かってくるものである。だから、ケガをする噛み止め犬や、良いといわれる鳴き止め犬の止め芸は、私が押し進める猪猟道の胸突き八丁にちようど差しかかった頃までに出来上がる若犬たちの猪止め犬芸の流れであると思っている。

私の猪犬軍団がこの胸突き八丁を見事に乗り越えて、どのようなすごい猪止め芸に進化変身して一流芸に完成して頂点に登り詰めたのか、前述の若犬たちの犬芸の成長の流れをもって、おのおの発言内容や評価、決断事項に照らし合わせてみれば、誰もがすぐ分かり十分納得できる良い解答が得られると思う。

（つづく）